10 年の時を経て、この冬、いよいよ沈黙を開く―――。
海外映画祭で話題沸騰、衝撃の事件の“その後”を描いた物語

ブ ラ ッ ク　ボックス　ダ イ ア リ ー ズ

「Black Box Diaries」

3 日間全回満員御礼の好スタート！

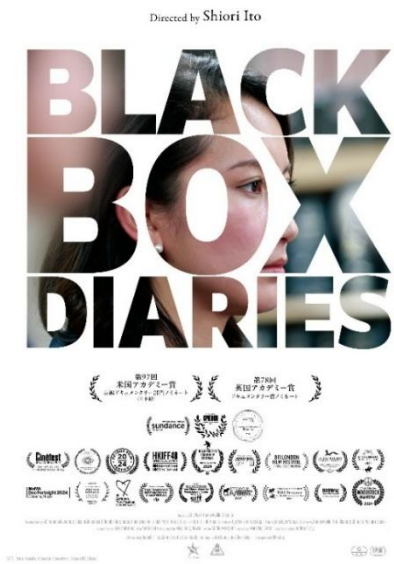
「劇場で観ていただくことが、変化への一歩」

伊藤詩織監督、エリック・ニアリ (プロデューサー)、ハナ・アクヴィリン (プロデューサー)

【好スタート・3 日間実施舞台挨拶のご報告】

平素よりお世話になっております。

映像ジャーナリストの伊藤詩織による**初長編監督映画『Black Box Diaries』。**
本作は、伊藤自身が経験した、衝撃的な事件を出発点に、沈黙を強いられてきた“ブラックボックス”を自らカメラを回しながら、記録した、事件の“その後”を描いた作品です。個人の体験から、社会の構造に鋭く迫る、これまでにない圧倒的なドキュメンタリー映画が誕生いたしました。ジャーナリストであり、映像作家の伊藤詩織が、自身の体験を元に、社会の沈黙や偏見、そして、自身に圧し掛かってきた圧力と向き合い続けた姿を、本人の視点から描きました。

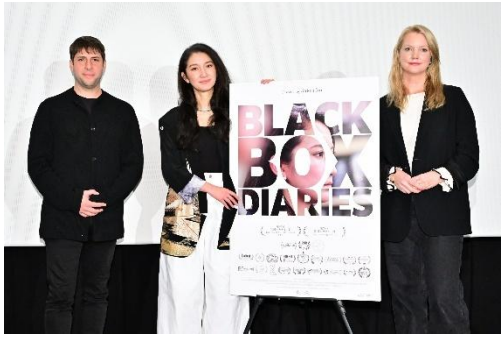


製作には、『新聞記者』(2019)『月』(2023) など社会派作品で知られるスターサンズが参加。2017 年の記者会見以降、実に 8 年にわたる製作を経て完成しました。
イギリス・アメリカとの国際共同製作として制作され、2024 年 1 月の第 41 回サンダンス映画祭ワールドシネマ・ドキュメンタリー部門大審査員賞　に正式出品。その後、世界各国の映画祭や賞レースで高い評価を獲得し、第 97 回アカデミー賞で**日本人監督初の長編ドキュメンタリー映画賞にノミネート**されました。

２０２５年１２月１２日（金）、ついに、『Black Box Diaries』の日本公開版が、T･ジョイ PRINCE 品川にて公開し、3 日間･計 6 回上映、動員数 1,000 人、興行収入220万円、全回満員御礼の好スタートとなりました！

映画『Black Box Diaries』は、2015 年 4 月 3 日、ジャーナリストをめざす伊藤詩織 25 歳が、ある日突然、思いもよらない性暴力被害を受けた、“その後” を描いたドキュメンタリー映画です。本作は、性暴力被害という個人的体験を通じて、警察、司法、メディア、といった日本社会の制度や慣習の中に存在する「見えない壁＝ブラックボックス」を、当事者の視点から記録しました。伊藤は実名を公表し、この事件と立ち向かうことを決意しますが、そこから伊藤の世界は一変します。性暴力の被害を受けたひとりの女性が、自身に起きた事実を記録しながら、社会の壁を少しずつ打ち壊す――。
世界が見つめ、社会の心を揺さぶった、ひとりの女性の “沈黙” と戦う旅が、ついに幕を開けました。

公開から金土日の 3 日間は、すべて監督・プロデューサーによる舞台挨拶付きのイベント上映を実施。
エンドロールが始まると同時に、場内には自然と拍手が起こり、上映後の会場は、作品が投げかけた問いと余韻に包まれた。多くの観客がそれぞれの感情を胸に刻むなか、監督・プロデューサーが登壇すると、敬意と共感を込めた大きな拍手で迎えられた。各回の舞台挨拶では、本作の見どころや、製作過程におけるエピソードなどを熱く語った。**伊藤監督は、本作の制作過程について、「ジャーナリズムについてこれまで信じてきたこと習ってきたことを一度置いて、ドキュメンタリー映画の中で何ができるかを学び直した機会だった」と語っている。**
事実の積み重ねだけでなく、恐怖、葛藤、迷いといった感情も含めて映し出すことで、これまで語られてこなかった“当事者の内側”を可視化することに真正面から挑んだ魂の作品だ。
450 時間を超える映像素材で映画を制作することで、、長い歳月の中で、監督自身がトラウマと向き合いながら編集を重ねてきた。完成までの道のりは決して平坦ではなかった。
舞台挨拶では伊藤監督が、**「日本へのラブレターとしてこの映画を作った」「恐怖はあったが、支えてくれた仲間ともに乗り越えてきた」**と率直な言葉で思いを語った。
本作のプロデューサーの一人のハナ・アクヴィリンは、スウェーデン出身の映像ジャーナリストで、2017 年に伊藤氏の会見を知り、ドキュメンタリー制作目的ではなく、一人の人間として彼女を支えたいという思いで連絡を取った。その後、友人として伊藤氏をロンドンの自宅に 3 年間住まわせ、彼女が日本に帰国する際には「盾になる」と宣言し、伊藤との深い絆を結び、撮影を共にすることを開始。この映画については、事件そのものだけでなく、声を上げたことで生じる誹謗中傷や葛藤など、その後の物語を描いている点が重要だと語る。
「本作は、事件そのものではなく、声を上げた“その後”に直面するトラウマや葛藤、闘いの過程の裏側を描いている点にある」と強く訴えた。「声を上げることには多くの困難が伴うが、それでも沈黙せず、真実を信じ続けることの大切さを映画は示している」と語る。さらに、**「この問題は決して特別なものではなく、家族や友人と作品について語り合い、共有することが、社会の変化につながる」**と呼びかけた。
プロデューサーを務めたエリック・ニアリは、ニューヨーク出身、東京を拠点に活動。伊藤とは 2020 年ごろにであい、5 年来の旅路に並走し、**「この日本の公開を迎え、彼女が日本で安全に活動を続けられることを心から願っている」と語った。そして、「観客一人ひとりが、メディアや先入観に左右されることなく、自身の目で作品を見つめ、考えてほしい」とし、特に男性に向けて、身近で問題が起きていることに気づいたとき傍観者にならず行動すること（アクティブ・バイスタンダー）の重要性**を訴えた。
本作には、深い共感や支持の声が寄せられる一方で、表現や手法をめぐる批判や問いも存在する。
『Black Box Diaries』は、観る者に安易な答えを与える映画ではなく、観客一人ひとりが、自分自身や身近な人の現実に引き寄せて考えることを促す作品であり、監督・プロデューサー一同は**「まずはこの映画を劇場で観ていただくことが、変化への一歩である」**とし、本作が、日本社会に新たな対話を生み出すきっかけとなることを期待した。



【提供用画像】
・ポスター、場面写真、イベント画像、クレジット表記　一式
https://drive.google.com/drive/folders/1ItSVKFsqOlGdTWMRzzESBq-BPJhkRqFU?usp=drive_link

■作品情報
『Black Box Diaries』
上映時間：1 時間 42 分
監督：伊藤詩織
プロデューサー：エリック・ニアリ、ハナ・アクヴィリン、伊藤詩織
企画：河村光庸｜エグゼクティブ・プロデューサー：四宮隆史、村松秀信、ロビーナ・リッチティエッロ、ジョシュ・ピーターズ、ニナ・L・ディアズ、ライザ・バーネット・フェターマン｜共同プロデューサー：行実良、長井龍
編集：山崎エマ｜撮影：ハナ・アクヴィリン、岡村裕太、伊藤詩織、大塚雄一郎｜抽象的イメージ：白奉珠圭氣｜カラリスト：佐藤文郎
編集コンサルタント：マヤ・デイジー・ホーク｜共同編集：マリコ・モンペティ｜音楽：マーク・デグリ・アントニ｜サウンド・デザイン／ミキサー：アンドリュー・トレイシー

製作：Hanashi Films、Cineric Creative、スターサンズ
配給：スターサンズ、東映エージエンシー
協力：日活
コピーライト：(C) Star Sands , Cineric Creative , Hanashi Films
公式 X: https://x.com/bbd_movie

T･ジョイ PRINCE 品川 にて 絶賛上映中

劇場営業：スターサンズ、東映エージエンシー
宣伝・パブリシティ：東映エージエンシー（bbd@toeiad.jp）